



奈良絵本を楽しむー『鼠の草子』からー

国文学研究資料館教授 齋藤 真麻理様

紹介者 八木 壮一委員長

「奈良絵本」とは、今から300年以上も前、室町時代後半から江戸時代中期にかけて制作された、美しい手描きの挿絵が入った絵本や絵巻のことです。一般に絵巻といいますが、たとえば国宝の『源氏物語絵巻』など、平安・鎌倉時代の絵巻を連想されることが多いかも知れません。けれども、この時代、16世紀から17世紀にかけて、奈良絵本という絵巻・絵本の一大ブームが当来し、日本人はさまざまな挿絵とともに多くの文芸を楽しんでいたのです。

奈良絵本ということばが使われ始めたのは明治時代のことですが、名称の由来は諸説あります。奈良の興福寺などで、仏画を描いていた絵師たちが手がけたのだという説もあれば、江戸時代後期に「奈良絵」という可愛らしい絵を描いた扇子や茶碗が奈良で売られており、その雰囲気から挿絵が似ているので、奈良絵本と呼ばれるようになったのだという説もあります。現在では、その大半は京都の工房（絵草紙屋）で作られたと考えられていますが、奈良絵本には制作者の名前や年次が書かれていない場合が多いため、制作の実態はいまだ十分に解明されていません。文学や美術史、歴史学など、諸分野の研究者が連携し、研究を進めています。

文学作品のうち、最も多く奈良絵本に仕立てられたのは、御伽草子と呼ばれる短編物語でした。その中には『浦島太郎』『酒吞童子』『鉢かづき』など、今なお親しまれている作品も含まれます。また、『竹取物語』『平家物語』や『百人一首』、謡曲や古浄瑠璃なども奈良絵本になり、挿絵とともに楽しまれました。このほか、中国明代の版本（出版された本）を奈良絵本にした例もあります。奈良絵本の制作に際し、中国との交流や、海を越えた出版文化が影響を及ぼしたことは、注目すべき現象といえるでしょう。

奈良絵本の中でも、古いものは室町時代まで溯ります。その一つが天理図書館に所蔵される『鼠の草子』という御伽草子の絵巻です。物語の内容から二系統に分けることができますが、第一系統の天理図書館の絵巻は、内容から見ても古い室町時代の作。第二系統はサントリー美術館が所蔵する絵巻など、複数が知られますが、本文も挿絵もほぼ同じであることから、多くは江戸時代前期に工房で商業的に量産されたものだといわれています。

物語の主人公は京都四条に住む鼠の権頭です。

彼は清水観音の導きにより人間の姫君と結ばれ、豪華な婚礼の宴が開かれます。やがて姫君は夫の留守中に別の座敷を覗き見してしまい、鼠だらけであることにたいそう驚き、「そういえば、夫も屏風や障子の下をひょくひょく歩いていたわ」と不審に思って鼠取りの罠を仕掛けます。哀れにも権頭はこの罠にかかり、姫君は屋敷を逃げ出して結婚は破綻、権頭は彼女の残していった鏡など、愛らしい道具類を和歌に詠んでは涙にくれるのでした。ついに彼は出家し、仏道修行に励んだといえます。物語に登場する鼠たちには「柵探しの左兵衛」など、鼠の習性をふまえた面白い擬人名がつけられており、台詞にも巧みな言葉遊びが隠されているなど、『鼠の草子』は読みごたえのある作品のひとつです。

さらに挿絵に注目してみると、二つの系統で大きな違いがあることに気づきます。天理本の挿絵では権頭は一貫して白鼠であり、姫君の前では人間の貴公子姿でした。白鼠は大黒天の使いと信じられ、福をもたらすめでたき動物として日本人に愛された存在です。一方、第二系統のテキストでは権頭は常に鼠顔で、罠にかかる場面では体が鼠色に彩色されており、その正体は忌まわしい黒鼠だったこととなります。けれども本文にはそうした言及はなく、挿絵だけが劇的な物語展開を描き出してみせるのです。挿絵と本文との交響から構築される物語世界こそ、奈良絵本ならではの魅力だと思います。

このように奈良絵本の魅力はさまざまですが、もう一点だけ挙げるならば、その時代の空気を敏感に取り入れ、成長する物語絵であることでしょう。たとえば、第一系統の『鼠の草子絵巻 別本』には、江戸初期風俗画に繰り返し登場する喫煙風景や、「寛文美人図」と同じ「決めポーズ」をとる女鼠が新たに描き込まれています。

こうして奈良絵本は、時代の空気を取り込んで新たな物語世界を展開し、あるいはいつの世も変わらぬ人間の情感を描き、人々に親しまれて来ました。そこには私たちがまだ気づかない楽しい謎解きが満ちています。先人が残してくれたこの文化遺産を、これからも皆様とご一緒に楽しみつつ、後代に引き継ぐことができれば何よりの幸いです。